

「大すきなしようちゃん」

渡辺 紗良わたなべ さら

「なかよくはんぶんこ。」

と言いながら、弟はおかしをもってわたしのところへ来ます。小さなおかしをわけあってたべるのが、いつものおやつのかんです。ほかにもおかしはたくさんあるのに、弟はわたしとはんぶんこしたがるのです。

わたしが五さいのとき、弟が生まれました。小さくて、赤くて、かわいくて、うれしくてたまりませんでした。たくさんだっこをしました。でもそれまでは、お父さんもお母さんもおじいちゃんもおばあちゃんも、おもちゃもおやつもみんな一人じみできたのに、なんでもはんぶんこしなきゃいけないになりました。がまんしなきゃいけないこともふえて、わたしはなんだかつまらないなあ、と思いました。

そんな弟も二さいになり、ほいくえんに行くことになりました。弟のいないしよかなへや、しゆくだいはすいすいすすみます。すきなテレビもたくさん見られるし、おもちゃ

もいくらでもあそべます。はじめはよかったけれど、だんだんさびしくなってきました。あまり楽しくありません。早く弟にあいたいと思いました。

そのとき、弟とお母さんが帰ってきました。わたしは、「しようちゃん。」

と言つてげんかんへはしりました。弟も、

「ねえね。」

と言つてはしつて来ました。わたしたちは、ぶつかつてころびました。二人でわらいました。そして、またいっしょにあそびました。けんかもするけれど、しようちゃんと一しよがやつぱり一ばんです。

はんぶんこは、わたしたちのなかよしのしるしです。楽しいことも、たいへんなこともはんぶんこして、これからもずつとなかよしでいたいと思います。しようちゃん、わたしをおねえちゃんにしてくれてありがとう。